

口語訳

- 105 私の創作し得た詩文は、いったいどこに散り落ちていくのだろうか。
106 私の今の感情・情感はどうしても眼前の風物に引き止められてしまう。
107 (それを押し止めるべく) 大志を抱いていても認められず郷里に帰り不遇でありながら節を曲げなかった
後漢の馮衍を憐れみ、我が身を慰めようとしたり、
108 (同じく) 文人として秀でた才能を持ちつつ不遇をかこっていた王粲が、その想いを綿々とつづつて、己
れの「憂い」を消そうとしたその文才に羨望の念を抱いたりもした。
109 (しかしながら今の私は、と言えば) 私の一言が忌諱に触れることを恐れて(その想いを形にすることす
らば) ばかられるのが現状である)。
110 (それを押して) 胸中の押し止めようもない衝動につき動かされて書きなぐるものだから、筆先は擦り切
れてしまった。
111 これらの草稿ともいうべき推敲の不十分な詩文は、いったい誰に見せるといふのか。
112 (今の私には) この私の書きなぐりの句に、唱和してくれる詩友とて、誰一人として存在しない。

語釈

105 ○文華…文章の華やかであること。ここでは自分の制作した詩文を指す。梁昭明太子『文選序』に「若其論讚